
新魔法戦記リリカルW

零夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新魔法戦記リリカルW

【Nコード】

N3722M

【作者名】

零夢

【あらすじ】

世界は核の冬から逃れることができた。

だがヒロのなすべきことはまだ終わってわけではない。

第97管理外世界へと飛ばされたヒロは、元の世界に戻る手段が見つかるまでの間、そこで出会った少女なのはの協力をすることにする。

だが、物語はヒロの想像しえない方向へと動いていく。

複数連載中のため（なるべく）もう一つの小説優先で書いているので投稿は月にあるかないか、といった感じですのでご了承ください。

その名はW（ウィング）（前書き）

あんた忙しいのに何やってんだ、と思う人もいるかもしれませんが
やっちゃいました、二重連載。

まずこの小説を読むにあたっての注意を。

リリナの第5話辺りからのスタートです。が、本編未視聴で書き始めてしまったため、原作には不従順です。今後もし言ったことがあると思いましたがそれが私なのでそここのところ、ご理解ください。

それでは、新魔法戦記リリカルW第一話、始まります

その名はW（ウィング）

目が覚めるとそこは森だった。いや、森というのは少々言い過ぎというものだろうか。先程暫く歩き回っていたのだがそう遠くないところで木々が途切れてしまった。それ以降は何も見当たらずこれ以上進んだところで無駄だと判断し、元いた場所へと引き返し今に至る。

（ここは……一体何処なんだ？）

少年——ヒイロ・ユイは考察する。

こういう風景はよく知っている。人類が宇宙に進出し、暮らすことが出来るくらいに科学技術が進歩した時代においても、こんな風景はそう珍しいものではない。むしろヒイロはこの風景を見たことがある上に、その場所がある国に暫く滞在していた事があった。尤も、今その国は事実上崩壊してしまったのが。

しかしそんなことは、今のヒイロにとってはどうでもいいことだ。何故なら彼の頭の中には、それ以上に不可解なことに気付いていたのだから。

（俺は少なくとも宇宙にいたはずだ。なのに何故こんなところにいる？）

改めて周囲を見回す。やはり自分がこんな所にいることがどう考えても不自然である。先まで自分が乗っていた機体がどこにも見当たらない。仮に誰かが自分を拾ったとしても、こんな場所に捨てていくなどまず無いことだ。そして何より、今の服装が信じられない。搭乗時のパイロットスーツではなく、普段着用する服装なのだ。それ故自分が誰かに助けられたわけではないことが必然的に決まって

しまう。

「ここで悩んでも意味はない。まずは情報を手に入れる。」

そう口にして、ヒイロは先に探索した場所とは逆の方向へ歩き出す。

瞬間、その方向から爆発音が聞こえ空中に光が見えた。その察知するや否や、ヒイロは即座にその場所を割り出して走り出した。

ヒイロが走り出したのと同刻、彼にとっての目的地になるその場所では白と黒の二人の少女が対峙していた。

いや。対峙、というには無理があるかもしれない。

第三者が見たなら白い服装をした栗色髪の少女が、黒を基調とした服装に、同じく黒のマントを身に纏う金髪の少女に黒の杖の様な物を向けられている、と判断するだろう。

それによくよく見ると白の少女はところどころに小さな傷を負っており、その服にもすこし汚れていた。

それだけで、どのようなワンサイドゲームが行われてきたのかも想像することはたやすい。

「あなたは……。」

「名乗るつもりはない。悪いけど、私にはあれが必要だ。だから早く回収に向かいたいんだけど……」

白の少女が言葉を投げ掛けるが黒の少女は冷たくそれをあしらう。

「……けど、私もそれを渡すわけにはいかない。だから、このまま行かせたりは！」

「そう。だったら……」

黒の少女は手に持った得物に力を入れ目の前の対象に向けて構える。

「私は君を倒す！」

少女は手に持った、漆黒の備える自身の得物を構え少目の前の白の少女に向かって降り被る。白の少女もそれを自分の持つ、彼女とは違う形の得物で受けようとするが今までの戦闘のせいか腕が動かない。

（さっきので！？）

直撃を覚悟し迫り来る刃に目を閉じる。が、彼女には何の衝撃もない。不可思議に思い閉じた目を開くと、一人の少年が自分に降り掛かるうとしていた攻撃を受け止めているのが目に入った。そして少年は言った。

「戦いの途中で目を閉じるな。死ぬぞ。」

「あの……あなたは？」

「俺はヒロ・ユイ。話はあとだ。今はこの状況を打開する。」

少年、ヒロは受け止めた手に力を込め杖を弾く。それによって黒の少女は強制的に後退させられることとなる。

「お前は……誰だ？」

「お前に名乗る必要は無い。」

「なら誰でもいい。邪魔をするならお前も倒す！」

少女は再び得物を降り被ると、ヒイロに向かって突進する。対してヒイロはその攻撃を身体を半身ずらすことで交わしそのまま少女の懐に入ると、彼女自身の勢いを利用して背負い投げの要領で投げ飛ばす。飛ばされた少女は空中にて猫の様に回転することによってその勢いを殺すと、即座に体勢を戻し再びヒイロへ突進する。

「見えているぞ。」

そう吐き捨てるのと先と同じ要領で少女の懐へと入り込もうとした。

『ソニックムーヴ』

だが彼女に向けて伸ばしたその腕は空を掴んでしまった。そして何が起こったのかを判断出来たのは後ろから声が聞こえてからであった。

「これで終わりだ。」

少女の降り下ろす戦斧が鮮明に見える。その目に写る動きが回避できないことを示している。手でかばおうにも間に合いそうにないなら諦めようか。まだ平和を成した世界を、彼女の作り上げようとしている平和な世界を見届けていないのか？そうじゃないだろう。

「俺は……！」

『オートプロテクション』

ヒイロのポケットが光り機械的な音がしたかと思えば、そのヒイロの前に作られた山吹色の円状の壁が少女の戦斧を止めていた。決

めるはずだった一撃を受け止められた少女は一度後退し、ヒイロとの距離をとった。その隙を利用しヒイロは自分のポケットをまさぐり、なかのものを取り出した。見ればそれは、ヒイロが昔搭乗していたことのあるMSの一部に酷似、むしろそれを縮小したものと形容出来る形をしたものの中心に山吹色の球体が埋め込まれているものだった。

「……これは？」

「お前……魔導師だったのか。」

「魔導師？なんのことだ。」

「知らないならそれでいい！」

少女は叫んで、もう一度ヒイロに攻撃を仕掛ける。

ヒイロは手の中にある球体を見ると文字が浮かんでいる。

『名前を呼んでください』

「名前、お前のか。」

ヒイロは少女の攻撃をかわしながら思考する。見覚えのあるフレーム。記憶を探り、この物に相応し名前を探し出す。

「……ウイングか。」

『声紋確認……登録完了。以降マイスターをヒイロ・ユイと認識します。初回セットアップ確認。』

その文字が浮かび上がると同時にヒイロの体が光りに包まれた。

「セットアップ！？させない！」

今ヒイロの身に起こっていることを妨害するために少女は即座に

攻撃を加えようとする。だがその一撃は光の中から差し出された何かによって受け止められてしまう。そしてその光の中から差し出された銃口に気付き、即座に退避する。そしてその跡を一条の光線が走った。

「外したか。まあいい、次で決める。」

光の中から現れたヒイロの姿は胸の位置に宝玉の様なものが埋め込まれた、白地に青を中心とした服装に包まれており右手は長身のライフルを、左手には赤いシールドが備わっている。そしてその背中には機械的な翼の様なものが付けられていた。

「やはり……これはウイングか。」

『バスターライフル残弾数5発です。』

「了解した。ならばこいつで決める。」

ヒイロは左手にマウントされたシールドの内側からサーベルを取り出すと魔力刃を発振させ目の前の少女へとその切っ先を向ける。

「魔力刃か……バルディツシュ。」

『サイズフォーム』

少女の持っていた得物はその形を変え、その先に金色の魔力刃を生み出した。その姿はさながら死神の鎌とも言っべきだろうか。ヒイロはその姿を見てガンダムパイロットの一人である死神の少年を思い浮かべた。が、そんな感傷に浸るわけもなく、すぐに思考を切り替える。

直後二人は動きだし、互いの魔力が衝突し合う。

最初は拮抗していたかに見えたが、戦闘慣れしているとはいえ、まだ十歳前後にしか満たない少女と、特殊な訓練を受けたおかげで

通常の軍人と比べてもその上をいくアビリティを備えているヒイロとでは、どちらに歩があるかは明白であった。

力押しが無理と判断した少女は押し合いを途切ると一度距離を置き再び攻めようとする。が、ヒイロはそれを良しとしない。

少女が離れたのを見ると直ぐ様バスターライフルに持ち換え少女に一撃を放った。少女はその一撃をどうにか回避することに成功するが、その隙を突いてヒイロは一息に接近しサーベルを降り下ろす。

「これで！」

「つぐうう！」

少女はどうか魔力障壁でこの一撃を受けることができたが、タイミングが遅れたために持ち堪えることは出来なかった。勢いを殺しきることができない少女はその勢いに従って地面へと墜落していった。

少女が落ちて行ったのを確認すると、ヒイロはもう一人の、先ほどの白い恰好をした少女のほうへと歩いて行った。

「……つつつ」

土に埋もれかけた身体をどうにか起こす。

どうやら直撃は避けられたようで、あまり体は痛んでいない。だがここからどうするか。

あの少年は思っていたよりも強い。いや、戦い慣れているといった方が正確な気がする。

まるで、最近になってやって来たあの人の様に。

とにかく、最初の女の子は全てにおいて素人であったが、今の少

年は違う。もっと本気で行かなければやられるのはこちらだ。

(……イト。フェイト。)

(アルフ?)

(さっきの光は何だい?何かあったの?)

(それが、予想以上に手強い相手に当たってしまったんだ。)

(……分かった。どうにかして私もそっちに(私が行こう)……お前は!)

アルフとの念話にいきなり男の声が割り込んできた。

(位置は把握した。今から結界内に侵入するぞ。)

(あ、はい。分かりました……)

(すまないが、数十秒ほど持ちこたえてれ。)

そこで男からの念話が途切れた。

(どうするんだい?フェイト)

(何とかやってみる。ジュエルシールドは手に入れなくちゃいけないし。それに倒してしまっても構わないんでしょ?)

(……わかった。死んじゃだめだからね。)

(了解、アルフ)

そしてまた、フェイトも念話をきった。

「いくよ、バルディッシュ。」

『了解です。』

フェイトは手に持った相棒、バルディッシュに一声掛け、再びあの少年へと立ち向かっていった。

フェイトが落ちていったのを確認するとヒイロはもう一人の少女の方へと近付いていった。

「あ、あなたは？」

「俺はデュオ・マクスウェルだ。お前はここで何をしている？」

ヒイロはいつものように名乗り、直ぐ様情報を得ようとするが目の前の少女はどういう理由か口籠ってしまった。

「言いにくいことがあるなら気にするな。俺が口を割ったことは記憶にない。」

ヒイロを知る人物以外からは到底信用されそうにない言葉を聞いて、少女は幾度か表情を変えた後、ヒイロの方へ向き直った。

「私は高町なのはです。それで……」

少女、高町なのははこの経緯と自分が魔導師であること、ジュエルシードと呼ばれるものに関わることを話した。

「それで奴と戦っていたというわけか。」

「はい。でも全然歯が立たなくて。」

「なら俺が奴の相手をしよう。お前はその間にジュエルシードとやらを回収すればいい。」

「わかりました。お願いしますね。」

「任務了解。」

「話は終わりか？」

声のした方向を見れば、先程の少女、フェイトが構えをとっていた。

ヒイロはなのはを後ろに下がらせ、フェイトにサーベルを突き付けた。

「あなたは倒す。今、ここで！」

「いいだろう。こい！」

その言葉が合図となった。

ヒイロとフェイト、両者互いの得物から発生させた魔力刃をぶつけ合い、拮抗させる。

ヒイロは持ち前の戦闘経験で、フェイトは魔導師としてのスキルで渡っている。

そんな中でヒイロは、ジュエルシールドの方へ向かわせたなのはの位置を確認する。

もし、このときプロであるヒイロが魔力探査を使っていたとすれば、なのはの位置を確認するのにもそうしていただろう。

だが、ヒイロはその確認に眼を使った。

確認に眼を使うということは、すなわち今までの対象から少なくとも眼を逸らしたことを意味する。つまりは意識を逸らしたのだ。

これはヒイロもその例外ではなく、僅かではあるがフェイトから意識を逸らしたのだ。

勿論、戦闘に関する最低限のことは知っているフェイトがそれを見逃すはずがなかった。

「よそ見をしている場合か！」

フェイトはヒイロの持つサーベルを弾くと、そのまま斬激を叩き込む。

こうなることはある程度予測できていたので、ギリギリのところ
でシールドを間に合わせるが、勢いで後ろに下げられてしまう。

フェイトはなのはに気付いたのか即座にそちらへ翔んでいく。

ヒイロはサーベルからバスターライフルに持ち帰ると狙いを定め
その引き金を引いた。

なのはに向かっていたフェイトもそれに気付くが、回避行動をと
るには遅すぎた。

バスターライフルから放たれた奔流はフェイトへと肉薄し、そし
て、その横を通りすぎていった。

山吹色の奔流が向けられた先はフェイトではなく、その向こう。

フェイトの側を通り抜けた砲撃はなのはに迫っていた別方向から
の魔力弾を相殺させた。

目の前で魔力の衝突が起こったため、その衝撃によってなのはは
飛ばされそうになるがどうか少し下がる程度に堪えることができ
た。

ヒイロは相殺に成功したと分かるとバスターライフルを投げ捨て、
サーベルに換装し即座に動き出した。

同時にヒイロの向かう方向、先の魔力弾が撃たれた方向からもま
た、別の影が高速で飛来してくる。

そして、互いのサーベルを組み合わせ、その名を叫んだ。

「また会ったな！」

「なぜお前がここにいる!?!」

「ヒイロ!」

「ゼクス!」

少女と騎士 前編（前書き）

長くなるので二編に分けます。

それとプレシアさんが原作と違うのは仕様です。だっていいじゃん、プレシアさん。

ヒロとなのはのちゃんとした出番は後編で ノシ

少女と騎士 前編

二人の男が交錯する。

一人は赤、青、白のトリコロールに黄色を加え、胸の中心に宝石のようなものを付けた服に、背中から二対の羽を携えた少年、ヒイロ・ユイ。

そしてもう一人は真っ白な服を纏い、手には魔力刃を発生させたサーベルと中世の騎士のような盾を持ち、その背には武骨な形をした二基のカプセル状のものを背負っている金髪の青年、ゼクス・マ―キス。

彼らが交差するのはこれで何度目か。

いや、実際には数える程度しかないかもしれない。

それでも、彼らからはまるで長年の、遙か昔からの因縁を持ち合わせているように感じ取れる。

それは、その様子を離れた場所から見ているなのは、そしてフェイトにも捉えることができるものであった。

(……凄い。ゼクスも、それにあの人も、私にはない風格がある……)

そう、ゼクスには初めて会ったときから、それが……

その日、フェイト・テストロッサは気分が高揚していた。

彼女はある理由からジュエルシードと呼ばれるものを収集しているのが、それは普段は一つ、運が良ければ二つ、とそれだけしか得られないものなのだが、どういう訳かその日は三つも手に入れることが出来た。

「フェイト、顔にやけてる。」

「え、ほ、ホント？」

自身の使い魔である、犬耳ならぬ狼耳を生やした女、アルフに指摘されてフェイトは自分の顔を手で探る。無論そんなことをしても意味はないのだが。

「でもさフェイト。なんでそんなに嬉しそうなんだい？」

「だってアルフ、三つだよ！三つもジュエルシードが手に入ったんだよ！」

これだけあれば母さんもきつと。

そう、私にはそのために存在しているんだ。母さんと、そして姉さんのために……

「ん……あれは？」

フェイトが顔を前に向けると、そこには誰かが倒れている。

確認の為に近付いてみると、倒れていたのは見たことのない赤い服を着た男だった。

そしてよく見てみると、彼の体から漏れ出たのであろう、赤い血が地面を濡らしていた。

「アルフ！連絡！」

フェイトはアルフに叫ぶように訴え、自身の回復魔法による応急処置をまだ新しい傷口に施していく。

「これで……」

そんな中でフェイトは自身の内側に妙な感覚を覚えたが、その時は『ただ母さんのいる場所で死体が出るのが気に食わないだけだ。』と、そう言い聞かせた。

「ジュエルシールドを3つ回収、ね。」

時の庭園と呼ばれる場所にある一室に、黒の長髪に黒いスーツ、その上から白衣を纏った三十代半ばにとれる女性と、シートが被さっているためその服装は見えないが、一目見て魅かれるほどに美しく映える薄い金色をした長髪の、眠っているにも関わらず独特の風格を醸し出す青年がいた。

女性は手元に浮かんだ複数のモニターから目を外して男の方を一瞥すると、深いため息をついた。

「それなのにどうしてこう、余計なものまで拾ってくるのかしらね。あれは。」

「余計なもの、ですか。それは申し訳ない。」

予想だにしていなかった声にプレシアは今の彼女に合わないよう

な小さな悲鳴をあげそうになるのを堪え、その方向を振り向く。

「起きていたのね。もしかして狸寝入りして私の独り言を盗み聞きしようとしていたのかしら？」

「まさか。いくら軍人といえど、そんなデリカシーの無いことはしませんよ。起きたのは本当につきさすからです。」

そう、とだけプレシアは短い返事をし、また手元に浮かべた複数のモニターに向き直る。

「貴女が私を拾ってくださったので？」

「まあ、間違いではないわね。ここまで運んできたのは私じゃないけど、拾って治療したのは私の意思よ。」

そうですか、ゼクスはそう一言返した。

プレシアはキーを叩く手を止め、上半身を起こす彼の方に顔を向ける。

「ところであなた、これが何か判る？」

プレシアはそう言って、何かのカプセルの様なものをゼクスに差し出した。勿論ゼクスはそんな物など知らない。見覚えのあるもので似たようなものがないとは言えないが、それがこの小さなカプセルだとも思えない。

「いえ。全くというわけではないのですが、ただやはりそれ自体については何も。」

そう、とプレシアは短くつぶやき、しばらく黙りこむ。そしてこんな質問をした。

「あなた、魔法って信じる？」

ゼクスは不意撃たれた。彼の常識下において、普通そのような質問をするのは冗談やせいぜい、あつてSFごとに関する戯れの様な夢語りを始める時でもないといけないものだ。

「魔法、ですか？」

「言っておくけど、これは冗談で妄想でもない、れっきとした真面目な質問よ。」

「……全くだすね。宇宙にまで人類が定住できる程に科学技術が発達したこの世の中で、魔法などという荒唐無稽な上に妄想甚だしいこと、到底信じられません。」

「そう、あなたの世界じゃそこまで人類は進歩していったのね。」

ゼクスは違和感を感じた。二人の会話に齟齬が、ズレが生じていることに対する違和感を。

「あなたの世界？ここはA・C・195年のはずでしょう？」
アフターコロニー

「ここがあなたの世界なら、ね。」

「まさかここが違う世界とでも、私が次元を越えてきたとでも？」

「ええ、そうよ。貴方は多分時空漂流者、分かりやすくいうと大規模な迷子ね。そしてここは時の庭園と言って、どこに属すでもない空間。あなたはここへの入り口に倒れていたの。本来なら、この場所を明確に知っていないと入れない空間にね。」

そこまで言われても尚、ゼクスは信じきれずにいた。宇宙にいた自分が何故ここにいるか、などということは幾らでも理由を付けることが出来る所為で、自分が別世界にいるということの確証を得るものが何も無いのだ。

そのため相手の発言を鵜呑みにすることもできず、今のゼクスとしてみただ疑うしかない。

「……失礼ながら、やはり私には……」

「まあ、そうね。そういう念入りなところは好きなんだけど……じゃあ、これならどう？」

そう言っただけでプレシアはゼクスに向けて手の平をかざす。

ゼクスは彼女の行動の意図が分らずどう言葉を返せばいいか考えようとした瞬間、彼の体は藍色に輝く紐の様なもので縛られていた。

「どう？これが魔法よ。」

プレシアがかざしていた手を退けると、ゼクスの体に巻きついていたものが霧散していった。

「……信じましょう。」

「理解が早くて助かるわ。それならやっぱり、これはあなたの物ではない、と？」

「ええ、先ほど申し上げた通りです。」

「だったら、見覚えがあると言っていたけどそれはどういうことかしら？」

「それを説明するには少しばかり時間を要すると思いますが？」

「構わないわ。あなたのこともある程度調べないと、こちらとしても幾らか都合が悪いのでね。」

「分かりました。では……」

その言葉を口火とし、ゼクスは語り始める。

個人感情の様な余計なものは排除し、あくまで世界の説明として、淡々と今に至るまでの経緯を述べていった。

「そう。あなたが搭乗していた“ツールギス”とかいうモビルスーツのパーツと、このデバイスが似ていると。」

「ええ。ですが、今話した通り、魔法とは一切無縁な世界でしたので。」

「これそのものは知らないのね。」

そこで、プレシアはあることに気付く。

治療のついでとしてその体を検査をしたときのことなのだが、その二十歳になったばかりにしては異様とも思える数値は、今の話を聞くと十分に納得できることだ。

だが、彼の体はそれだけでなく、リンカーコアと呼ばれる魔法の使用に必要な器官を持ち合わせていた。

こういうことは稀に起こることではあるが、彼の場合その容量が極めて稀とも言える。

通常魔法に縁の無いものがリンカーコアを持った場合、魔力資質は良くてAランクといったところだが、この男は少なくともAA+はあるだろう。

魔力資質は今のところSSランクが最高と言われているが、それは古代ベルカにいたとされる総合Sランク以上の魔導師集団、“伝説の11騎士”と謳われた11人の内の3人が到達した領域であり、その存在自体が逸話に近い話なので正直有って無いような領域でもある。

因みに、先に挙げた内の一人は生まれつきだが、別の一人は生まれる前に施された今は封印されてしまっている技術によるもので、もう一人は少年である頃に無理矢理に底上げたものと言われているため、純粋なSSランクは一人だけとも言える。それを考えると、AA+というランクはかなり高いものであるといえる。

「ゼクス、貴方本当に魔法を知らないのよね。」

「先も説明したように、私は魔法などとは縁の無い世界の出身です。知っているはずがないでしょう。」

「いえね、実はあなたには魔導師の素質、簡略化すれば魔法を使用するための力が備わっているのよ。」

「魔法とは縁の無い私に、ですか。」

「そうよ。たまにあることだけれど、魔法とは縁の無い世界の間でも、生まれつきでそういった素質を持つていることがあるのよ。もともと、普通はその事に気付くこともないから、意味が無いのだけれど。ともかくあなたには、魔導師の素質がある。それも例外的にね。」

「あるから、どうだと言うのですか？」

「そうね……恩返し、いえ、私と取り引きをしない？」

「取り引き？ いったい何を？」

「簡単なことよ、そう気張らなくてもいいわ。私がはあなたに研究、正確には研究材料を調達する手伝いをしてほしいだけ。見返りは……そうね、あなたの保護といったところかしら。」

プレシアの出した条件は、ゼクスにとって、決して悪いものではなかった。むしろ、ここで蹴ってしまえば後が分からなくなってしまう。研究、という言葉が気になるところではあるが、ここが異世界である以上彼女の提案を呑む以外に自分の身を保障できる道はないと考えるても良いだろう。

「わかりました。取り引き成立、ということ。」

「理解が早くて助かるわ。とりあえずあなたにはこのデバイスを使ってもらうけど、傷が完治するまでの約三日間は訓練なし。いいわね？」

「わかりました。」

「それじゃあ私はラボに戻るけど、治るまでの世話は私の娘、あなたをここまで運んできた子に任せてあるから。何かあればその子

に頼みなさい。」

それだけ告げると、プレシアは足早に部屋を出て行った。後に残されたゼクスは、彼女の出て行った場所をしばらく見つめ、すぐに体を横にした。

「しかし、受け入れがたいものだな。異世界へ飛ばされて、その上私は魔法使いになる。いや、ここでは魔導師とか言ったかな？」

そんなことはどうでもいいが、と自嘲的に内心で付け加える。

実演までされたのから信用できないわけでもないのだが、どうにも受け入れることは難しいようである。

つい先刻まで宇宙で、それこそ人類の行く末が懸かった戦闘を行い、自らを半ば犠牲とする道を選んだにも拘わらず、気がつけばこのような状況に取り巻かれている。それに、肉体と魂が生きているとはいえ、既に死んだ身であるも同然と言えよう。それならば、ゼクス・マークスという記号が与えられた肉体を他に使わせるのも、また――

「誰かな？」

そこまで考えたところで、ゼクスは入り口に向かって声をかける。そこから顔を出したのはゼクスよりも色の濃い金髪をツインテールにした少女だった。

「入っても構わないぞ。そんなところに立っていたのでは話もできないだろう。」

ゼクスの言葉に安心、というよりは安全を確証したのだろう少女は、軽やかな足取りで彼のもとへと歩み寄った。

「君が私を運んでくれたのか？」

「私一人ではないですが、応急処置と搬入を。」

「そうか。君には感謝している。」

「別にあなたのためを思ってたわけではありません。母さんの空間を死体で汚したくなかっただけですから。」

少女は表情こそ変えないものの、その声はとても冷たいものだった。ゼクスを警戒しているわけでも、また軽視しているわけでもないようではあるが。ただ、少なくとも、彼女に受け入れてもらえないことだけは、ゼクスにも理解できた。

「それでもだ、君が私の命を救った要因の一つであることに何ら変わりはないだろう。それに、この気持ちを無理に受け取る必要もない。私がこう思っていることを頭の片隅にでもおいてくれれば、それで十分だ。」

「ではそうします。それで、次は身の回りの世話ですが……」

「君が担当してくれるのか？」

「ええ。食事等のことと、後は魔法の訓練を。」

そこまで言うとは少女はゼクスの返事も待たず、部屋を去っていくとしたが、ゼクスはその腕を掴み、彼女を引きとめる。

「まだ何か？」

「いや、大したことじゃない。君と一緒に私を運んでくれた者にも礼を伝えてほしくてな。」

「……後で伝えておきます。それでは。」

やはり少女は、ゼクスを避けるようにして元来た道に戻っていく。彼女は少なからず、何らかの秘密を持っている。彼女の終始一貫し

た、ゼクスに関わろうとしない態度から、ゼクスはそう考えた。すると、ふと思いついたように、入り口まで来たところで少女はゼクスの方を振り返る。

「言い忘れてましたけど、いくら治療後とはいえ、服は着た方がいいですよ。」

そう言われて初めて、自分が何も身にまわっていないことに気づく。上から下まで、全て。

もう一度自分の体へと向けた視線を扉の方へやると、既に少女は去った後であった。

もしかすると、彼女のあのそっけない態度は、これが原因だったのだろうか？

そんな考えがゼクスの頭をよぎった。

あれから数日が経ち、フェイトがジュエルシードの回収を再開したのは、ゼクスの完治を確認した翌日であった。彼女はゼクスの完治を確認すると、調理場等の設備および時の庭園に内在する訓練施設の説明、加えてデバイスの起動法を教えてジュエルシードを探しに出て行ってしまった。その為、ゼクスは今の今まで、つまりフェイトが最後にいた日を除いて彼は独りで魔法を修得しなければならなかった。

（基礎どころか最低限のことを一日で詰め込ませて任せるとは…

…)

「今の私はただのゼクス・マーキスだというのに。」

思わず口に出してしまった。周囲に誰がいたと言うわけでもないのであまり気に止める必要は無いが。

「愚痴を声に出すのはエレガントではない、といったところか？」

自虐的な笑みを浮かべたゼクスは、彼の友人の口調を借りて自嘲した。

ふと、通路を歩くゼクスの目に、今しがた思い浮かべていた金髪の少女が映った。その彼女は心なしか、その大きくはない臍を引き摺っており、服の隙間に見える陶白色の肌には切り傷や裂傷、痛々しい腫れ痕が窺える。

そして前を歩いていたゼクスに気付いたのが、少し虚ろな目でこちらを見上げる。

「……ゼク、ス？」

「帰ったのか、フェイト。だが、その傷は……」

「何でもない、気にしないで。」

そうは言ったものの、迫り来る疲労感は隠すことが出来ず、フェイトは倒れそうになるが、詰め寄ったゼクスがその体を受け止める。

「何でもない訳がないだろう、そんな体で。」

「私は次の収集に行かなきゃならないんだ。だから離して、ゼクス。」

「そのなりでよく言える。いいから休め。それが今の君の義務だ。」

「フェイト！」

ゼクス前方、つまりはフェイトの来た方向からアルフが走ってくる。

「アルフ……」

「やっぱり駄目だよ。一度ここで休んでいかないと。」

「アルフも、そんなことを。駄目なんだ、あれじゃあ。もっと……と……？」

フェイトは首元に強い衝撃を感じたかと思うと、強制的にその意識を奪われゼクスに倒れかかった。

それを見ていたアルフは、実行者であるゼクスに怒鳴る。

「お前、何を！」

「安心しろ、アルフ。気絶させたただけだ。それに、こうでもしなければ聞かなかっただろう。」

「それは、そうだけど……」

「今は傷の方だ。私の寝室に向かうぞ。ついてこい。」

自分に比べればずっと小さな体を抱き抱えると、ゼクスは足早に借り部屋へと引き返し、アルフもその後を追った。

「ん……」

「目が覚めたか？」

フェイトの目が覚めると、その隣に置かれた椅子に座っていたゼクスに声をかけられる。そうして彼女は、先程彼によって気絶させられたことを思い出す。

「ゼクス、どうして邪魔を。」

「邪魔どころか感謝されるべきことだと思っただがな。」

「どこが。あなたがあんなことをしていなければ、私は」

「死んでいたかもな。」

あたかも当然のことのように、ゼクスは目の前の少女に向かってあっさり言いつける。そこにはおおよそ十に達している少女に対する配慮などというものはない。むしろフェイト自身そんな配慮の有無はどうでもいいことなのだが。ゼクスもそれを分つての上である。

「言っておくが君は、腫れていた、数か所に切り傷が出来ていたなどというレベルの怪我ではなかったのだぞ。手足はひびだけで済んでいたが、肋がいくつかやられていたのだからな。」

言われてフェイトは体を起こし、シートから出た半身を見ると、ちょうどゼクスの言った箇所、胸元から鳩尾辺りにかけて、さらしのように包帯が巻かれていた。

「あまり触るなよ。回復魔法はまだ種類が豊富でないのな、極端に治癒を促進しているだけの状態だが、明日にでもなれば全て治っているだろう。」

「これ、あなたがやったの？」

「魔法をかけたのは私だが、包帯はアルフがやってくれた。私が行うのもあれだろう。」

「そう、なんだ。ありがとう。」

「いったいどんなことをしたのかは知らないが、無茶だけはするな。お前が傷ついて悲しむ者はいるのだから。」

「……………」

そのフェイトの無言を、ゼクスは反省の意思と捉えて別の話を切り出した。

「それと、突然だがフェイト。明日、いや、二日後に私と模擬戦をしてくれないか。」

ゼクスの突然の申し出に、フェイトは少なからず驚きを感じていた。ここへきて大した時間もたっていないというのに、この男はほとんど独学で基礎的な回復魔法を身につけているのだ。それはつまり、そういった方面に対しての圧倒的な吸収力と消化力を備えているということだ。だとすれば、戦闘の方はいったい、どの程度にまで上り詰めているのか。気付けば、驚きは興味へと変わっていた。

「でも、治つたらすぐにでもジュエルシードを……………」

「プレシアには私から言っておく。彼女と契約をしている分、私が出られるようになるのは彼女にとっても悪いことじゃないはずだ。何も問題はないだろうさ。」

「……………分つた。でも、模擬戦は一度きりだよ。それが終わったら私は収集に戻るから。」

「ああ、それで構わない。ダメなら意味はないからな。」

ゼクスは納得して、微笑みを浮かべる。不思議なことに、それがフェイトにはとても美しく見えた。

「ところで、アルフはどこに行ったの？」

「彼女は確か、今君の服を取りに行っている。」

フェイトは何気なく伝えられたその言葉を何気なく受け入れたが、その前に彼女の理性がブレーキをかける。さっき見たときはうまい具合に隠されていたので何も感じなかったが、意識が明瞭になるにつれて自分の肌にどの程度シートが触れているのかがはっきりしてくる。

慌てて、ゼクスからは見えないようにシートの中を覗き込んだフェイトは変な悲鳴を上げて自分の体にシートを密着させると、分りやすいほど真っ赤に染まった顔をゼクスに向けて言う。

「ゼクスって……ロリコン？」

その言葉にゼクスは何を思ったかは知らないが、この時戻ってきたアルフが言うには、ゼクスはただ声こそ上げないものの、おかしそくに笑っていたらしい。

少女と騎士 前編（後書き）

はい、かなり長引いてしまいました、種羽第二話。

前回の投稿から実に三カ月もたっているんですね。多分受験終わるまではこんな感じだと思いますのでその辺はあしからず。

本編の方ですが、ゼクスこれでよかったっけ？って感じです。途中ちよっとトレーズだったので何度か修正していますが、もしかしたらまだトレーズな部分があるかも……

え？プレシア？あれは意図的に変えたんだよ。だから問題なし、多分。

もしかしたら原作と違っていい人で終わるかも知れません。

それでは、次回まで気長にお待ちください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3722m/>

新魔法戦記リリカルW

2011年11月11日17時59分発行